Bulletin of Aichi Univ. of Education, 68 (Art, Health and Physical Education, Home Economics, Technology), pp. 1-9, March, 2019

小学校音楽科における「思考を伴った試行錯誤」による「音楽づくり」の活動 ── ICT 機器を活用して「共創」を模索した試行実践（その１） ──

新山王　政和*　河田　愛子**

*音楽教育講座
**南山大学附属小学校

Elementary School Music-Making Activity Utilizing the Method of “Trial and Error with Thinking”: Trial Practice of “Co-creation” Using ICT Equipment (Part1)

Masakazu SHINZANO*　and　Aiko KAWATA**

*Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
**Primary School Affiliated to Nanzan University, Nagoya 466-0838, Japan

１．研究の背景と目的

図画工作科が自身の活動結果を目で見て振り返りができるのに対して、時間芸術である音楽科では音楽そのものを客観的に捉えることが難しい。しかし、自らの音楽表現（歌唱、器楽、音楽づくり）を冷静に受けとめる「メタ認知」や、聴き取った楽曲を留める「記憶」が不足していれば、振り返り高めていく創意工夫の活動は成立しない。これまで筆者は、IC レコーダーによって表現と鑑賞を一体化させる試行実践を重ねてきたが、今回の研究では「音楽づくり」の活動を取りあげ、IC レコーダーを活用して思考を伴った試行錯誤によって自ら創意工夫を深めていく実践を試みている。そして本報告では、主に次の４点の有効性の検証をめざした。

①音楽的に自己を客観視し、自分なりの“解”に向けた課題を見つける力を養う。［問題点の特定や課題設定の力、計画立案力（段取り力）］
②課題解決に向けて思考を伴った試行錯誤を繰り返して、自ら創意工夫を重ねることのできる力を養う。［計画遂行力や自己実現の力（達成する力）］
③自分なりに見出した“解”を冷静に検証し続けることのできるメタ認知の力を養う。［モニタリングやリフレクションの力（こだわる力）］
④表現の活動は、音楽構成要素を聴き取ったり諸要素と曲想や雰囲気の変化を感受したりする鑑賞の活動と組み合わせて行う。

なお本研究は、春日井市立勝川小学校（小瀬木崇教諭）と、南山大学附属小学校（河田愛子教諭）へ試行実践を依頼しているが、本報告では分析が進んでいる河田教諭による南山大学附属小学校における実践を紹介する。また一連の研究は「カワイサウンド技術・音楽振興財団」から研究助成を受けて行っている。

２．本研究のスタンス

演奏とは、単に音符を音へ置き換える作業ではなく、自分の音楽的要求というフィルターを通しながら楽譜を音楽へと再変換することである。そして鑑賞も、漠然と音を耳にするのではなく、自分の嗜好に合った演奏表現を求めながら自らの音楽的要求と照らし合わせて聴くことで心の中に生じる情動の変化を楽しむものである。つまり“演奏”や“聴く”という行為そのものが、創造的な活動を行っていることになる。筆者の先行研究では、イメージングや思考を伴った活動をコアにして表現と鑑賞が一体となった活動を行うことで、様々な音楽構成要素に気付いて感じ取り、その働きや効果を知り、それを操る技や方法を身に付け、表現や聴き方を改善したいと感じるようになることを明らかにしてきた。具体的には、音の繋がり方（メロディー）や音の重なり方（ハーモニー）、音の並び方（リズム）から形づくられる音楽のよさ（良さ、佳さ、善さ）や、組み合わせの違いから生まれる微妙な響きの変化を聴き取ったり、そこから生まれる曲想や雰囲気の違いを意識して感受したりすることで、自ら音や音楽へ向かっていくような「能動的に音楽と向き合う活動」につ

いて、表現と鑑賞の両面からアプローチすることが効果的であることを確認している。

これらの成果に基づいて、本研究では「音楽づくり」の活動でも、IC レコーダーが音楽の普遍的な“よさ”（良さ、佳さ、善さ）や“うつくしさ”等の美的感覚に気付くのに有効であり、自分なりの“解”を追究する学びの本質を育むのに効果的に働くことを明らかにしたい。そして児童は、自らの「音楽づくり」の活動を冷静に振り返って思考を伴った試行錯誤を繰り返すことで得られる創意工夫のプロセスの大切さに気付くことができるようになり、そのプロセスを重視することこそが「再構築・構造化・更新される知識」の獲得へと繋がっていくことを提案したい。

３．本研究と現代的教育課題のかかわり

３．１　「生きた知識（更新される知識）」との関係

文部科学省の新学習指導要領の基盤には、「生きた知識（更新される知識）」という考え方がある。そもそも音楽科における知識とは、それまでに積み重ねてきた音楽活動や音楽経験と照らし合わせながら既知の知識を自分なりに整理し(構造化)、それらの意味や働き、効果などを考えたり体感したりすることで、自分なりの嗜好や価値観へと高めていき（再構築)、さらに様々な体験や活動を通じて考えたり確かめたりすることで、自分自身の捉え方が間違っていないか、他の考え方は無いのか、自分なりの価値観に齟齬や矛盾は無いのか等を、思考を伴った試行錯誤によって確認し、知識をより強固なものとして「更新」していくものである。

音楽の分野では「知っていることと出来ることとは違う」としばしば言われている。つまり、知っているだけでは演奏や「音楽づくり」、鑑賞へ繋がっていかず、音や音楽表現と結び付けることではじめて知識が生きてくるのだが、正にこれが音楽科における「構造化され再構築・更新される知識」であろう。

３．２　批判的思考や Active Learning との関係

前述したとおり、IC レコーダーを活用した一連の研究で育成をめざしているのは、主に次の２点である。

①音楽的に自己を客観視し、自分なりの“解”に向けた課題を見つける力を養う

②課題解決に向けて思考を伴った試行錯誤を繰り返して、創意工夫を重ねることのできる力を養う

これらは「現代的教育課題」の一つである「批判的思考（自己や自分自身の考えに対して批判的に向き合う力)」や、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング)」にも繋がるものである。よって、個人の価値観にのみ依拠した“ひとりよがりな演奏や鑑賞”や“偶然性だけの「音楽づくり」”から離れて、思考を伴った試行錯誤のプロセスを重視することで得られる知識や技術の裏付けを伴った創意工夫を追求したい。

３．３　新しい小学校学習指導要領音楽編との関係

①小学校音楽科の教科目標

ここで、『文部科学省 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編』より、要約抜粋しながら音楽科の教科目標を確認しておく。今回の改訂では全ての教科において育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」に分けて示されている。音楽科の目標は「第２章第１節（p.9)」へ次のように示されている。

表現及び鑑賞の活動を通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1)曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに，表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。

(2)音楽表現を工夫することや，音楽を味わって聴くことができるようにする。

(3)音楽活動の楽しさを体験することを通して，音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに，音楽に親しむ態度を養い，豊かな情操を培う。

また、ここにある「音楽的な見方・考え方」は、次のように説明されている。

音楽的な見方・考え方とは、「音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活や文化などと関連付けること」であると考えられる。(p.10)

ここで分かるとおり、音楽の活動とは表現と鑑賞が一体化して行われるものであり、そこでは「音楽の構造（音楽を形づくっている要素の表れ方や、音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みとの関わり合い：p.89)」と、それによって醸し出される「曲想（その音楽に固有の雰囲気や表情、味わい)」の変化に気付き感じ取るとともに、それを表現するために必要な技能を身に付けたり、その表現方法を工夫したり、自分なりに味わって聴くことができるようにしたりすることが求められている。その際「音楽的な見方・考え方」で示されているとおり、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えて、自己のイメージへと結び付けるようにしなければならない。今回の試行実践では、「鑑賞で、音楽構成要素が生み出す曲想の変化に注目する」→「先に表したいイメージを固めてから、それを表す旋律づくりを行う」→「思考を伴った試行錯誤を通して、表したいイメージに沿った旋律づくりを創意工夫する」の３段階の活動の流れを特に重視した。

②活動の過程（プロセス）を重視する

新しい学習指導要領では、「過程（プロセス)」が重

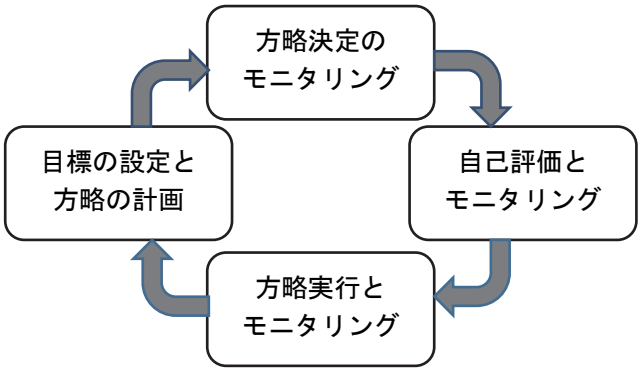
視されている。例えば、A表現「(3)音楽づくり」では、「ア(イ)どのように音を音楽にしていくか～略～(低学年) p. 154」「ア(イ)音を音楽に構成することを通して～略～(中学年 p. 155、高学年 p. 157)」とあるように、出来上がった作品を総括的に評価するのではなく、作っていくプロセスを大切にし形成的に評価することを求めている。よって本研究でも、タブレットやPC 上で音符を並べて機器に音を奏でさせるのではなく、自ら鍵盤ハーモニカを用いて試行錯誤しながら“音を旋律へと紡いでいく活動”を設定している。

４．試行実践における活動モデルの措定

４．１　「自己調整学習」の学習モデル

B. J. ジマーマンは、自己調整学習とは「目標を設定し、それを実現するための方略を計画する段階」→「その方略の決定そのものをモニタリングする段階」→「自己評価をモニタリングする段階」→「立てた方略の実行具合をモニタリングする段階」の４段階が継続的に繰り返されることで成立するものとしている。(B. J. ジマーマン他、2008)　ここで重要なのは、活動の結果だけをモニタリングするのではなく、方策そのものの評価と自己評価について同時にモニタリングすることである。これを参考にして、本研究の試行実践である音楽科授業の活動モデルを措定してみたい。

［自己調整学習のモデル図］
B.J.ジマーマン他（2008）より筆者作図



４．２　本研究で措定した活動モデル

前節のモデル図や、前章で述べた「自己に対して批判的に向き合う批判的思考」「主体的・対話的で深い学び(Active Learning)」「構造化し、再構築、更新される知識」「活動の過程（プロセス）を重視」等を鑑みながら、本研究における試行実践の活動モデルを次の３段階に措定している。

①鑑賞と「音楽づくり」の活動を一体化させる。この第１段階では、鑑賞によって音楽の構造と曲想の変化の関係を知覚し、そこから何を感じるのかを感受する。

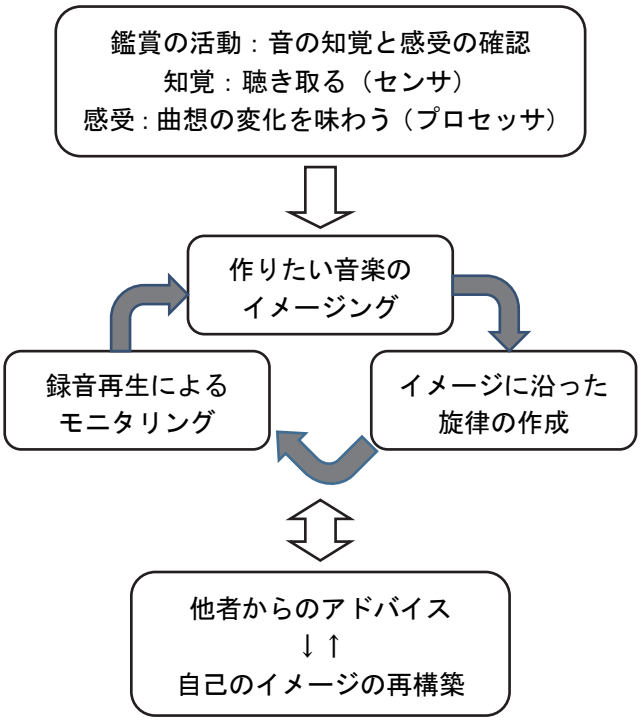
②第２段階では、作りたい（表したい）ことをきちんとイメージングしてから、それを表す「音楽づくり」の活動に取り組む。その際、次の２点に留意する。

・音楽的に自己を客観視し、自分なりの「解」やそれに向けた「方略」を見つけ出す。見つけ出した「解」や「方略」が適切であるかどうか、IC レコーダーを活用して繰り返しモニタリングする。
・IC レコーダーを用いて作った作品をモニタリングすることで、よりよい「音楽づくり」に向けて思考を伴った試行錯誤を繰り返す。これを重ねることで、自ら創意工夫を深めていく。

③第３段階では、作った作品をより客観的に評価するために他者とアドバイスを交換することで、冷静な創意工夫の着眼点を得る。(リフレクション)

これらを基にして、本研究では次のような活動モデルを措定している。

［今回の試行実践で措定した活動モデル］



５．試行実践の概要

５．１　筆者から実践協力者へ依頼したポイント

①「音楽づくり」の前に鑑賞の活動を行い、音や音楽を形づくっている要素に気付き(知覚)、諸要素と曲想との関係を感じ取って味わう活動を行う(感受)。国語科で作文の前に本をたくさん読むのと同じ。

②IC レコーダーを介在させて思考を伴った試行錯誤を積み重ねる。(作った旋律にこだわる)

③最初に２人組のペア学習で何度も聴き直しながら創意工夫し、さらにペア２組の４人で聴き直しながらグループ内での対話的な活動や学び合いを深めていく。(他者の価値観との対比)

④IC レコーダーの有用性と効果的な活用方法、教師による声掛けやアドバイスの効果を検証する。
⑤児童自らが音を出す楽器（今回は鍵盤ハーモニカ）を使用し、タブレットや PC などの並べた音符を機器が奏でてくれるものは使用しない。

５．２　協力者による試行実践の概要

今回、試行実践の協力を得た小瀬木教諭と河田教諭による研究授業の大まかな内容は次のとおりである。
①春日井市立勝川小学校４年生（小瀬木崇教諭）
「ソーラン節」「南部牛追い歌」「谷茶前」「島唄」の鑑賞によってリズムや旋律の特徴を感じ取らせた後、沖縄の音楽の構成音を用いて「音楽づくり」を行わせた。次に「合いの手」に合うように、リズムや旋律をさらに工夫させた。分析と考察を現在進めており、その結果は『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』において報告する予定である。
②南山大学附属小学校５年生（河田愛子教諭）
動物の様子や雰囲気と音の高さ・リズム・強弱の関係に注目して「動物の謝肉祭」を鑑賞した後、それらの要素を工夫して動物を表す「音楽づくり」を行った。その分析と考察は、次章以降で報告している。

６．河田愛子教諭による南山大学附属小学校における小学校５年生を対象にした研究授業の概要

「第５学年音楽科学習指導案」
指導者　河田愛子（2018 年 3 月実施）

６．１　題材名　「音楽づくりをしよう」

６．２　主体的・対話的な活動を深めていくための単元における手立ての工夫

①単元導入時の手立て
「音楽づくり」の中で、自分のイメージにつなげようと試行錯誤するためには、最初に自分がどのような旋律を作りたいかはっきりとイメージさせ、そして作る旋律を通して何を表現するのか、具体的な様子やテーマなどを明確にもたせたい。
②主体的に「音楽づくり」をするための手立て
児童が主体的に「音楽づくり」に取り組むようにするために、旋律を作る前に音楽の要素をどのように工夫すると自分のイメージしたことが反映されるのか考えさせておく。そのために『序奏とライオンの行進』『めんどりとおんどり』『カンガルー』を鑑賞する時に“動物の様子”と“曲に使われているリズム”の関係に目を向けさせ、話し合う場を設定する。
③「音楽づくり」を深めるための手立て
「音楽づくり」の試行錯誤を深めるためには、自ら作った旋律を何度も聴き直し、自分のイメージに近づけることが大切である。そのために、IC レコーダーを活用することで自ら作った旋律を客観的に振り返させたい。まず各自が作った旋律を IC レコーダーに録音し、それをペアの児童と聴き合い、互いにアドバイスしながら旋律の手直しをさせる。ペアの活動を設定することで、作った旋律に対する意見を発言する機会を増やし、自分のイメージや考えを旋律に反映させやすくする。IC レコーダーの録音を何度も聴くことを手がかりとして、グループ内やグループ同士の学び合いを促し、主体的・対話的な活動を促していく。

６．３　指導計画（３時間完了）

①動物の様子と音楽の要素の関係について考えよう
②動物を音楽で表現しようーその１（ハ長調またはイ短調、４小節または８小節）
③動物を音楽で表現しようーその２（ハ長調またはイ短調、４小節または８小節）（本時）

６．４　本時の指導

動物の様子や雰囲気と音の高さ・リズム・強弱の関係に注目して「動物の謝肉祭」を鑑賞した後、それらの要素を工夫して動物を表す「音楽づくり」を行う。まず“作りたい（表現したい）イメージ”をしっかり固めてから、「音楽づくり」に取り組ませる。
①『動物の謝肉祭』の「序奏とライオンの行進」「おんどりとめんどり」「カンガルー」を１曲ずつ鑑賞し、それぞれの曲の「リズム、音の高さ、強弱」について気付かせる。児童の発言は随時板書して意見交換し、全体へと広げる。（p.8 のシートを参照）
②気付いたことを生かしながら「音楽づくり」をすることを伝え、作りたい動物を選び、鳴き声や様子の特徴を考えさせる。
③考えた鳴き声や様子の特徴を思い浮かべながら鍵盤ハーモニカで旋律を作らせる。教師は児童の間を周って積極的に声掛けをする。ある程度まとまったところで作った旋律を IC レコーダーに録音して試聴したり、二人組で聴き合ったりさせる。旋律を作ることが困難な児童には、友達に助けてもらったり、教師へアドバイスを求めたりするように声掛けをする。（活動で使用したワークシートを p.9 に載せておく）
④二人組の２つを組み合わせて試聴させ、４人でアドバイスし合ったり意見交換したりさせる。

［教材］教師が作成したモデル曲の拡大楽譜と、その音源。ワークシート。IC レコーダー（２人に一台）。鍵盤ハーモニカ（各自）。

＊参考　試行実践で使用した IC レコーダー

Panasonic RR-SR30　71mm×110mm×24mm×約 106g

６．５　本時の流れ

①前時で話し合った動物と「リズム・音の高さ・強弱」の関係を想起する。

・前時に決めた動物とその様子にあった「リズム、音の高さ、強弱」を考えさせて、ワークシートに書き込ませる。

②楽器で実際に音を出しながら旋律づくりをする。

・作った旋律を IC レコーダーへ録音させ、聴いて確かめるように促す。

③ペアの友だちに意見をもらったり、アドバイスしたりしながら、動物のイメージにより近付くように旋律の手直しをする。

・手直しのための IC レコーダーへの録音・再生は必ず２回以上行わせる
・ワークシートにこれまでに学習した「音符」や「リズム、強弱」の一覧をのせておき、旋律づくりの参考にさせる。
・随時、児童の意見をホワイトボードにまとめ、旋律づくりの材料にさせる。
・「リズム、音の高さ、強弱」を考えることが難しい児童には声を掛けて、友達に助けてもらったり教師へアドバイスを求めたりさせる。
・アーティキュレーションを付けることに気づいた児童がいたら、全体に広げて旋律づくりに生かすように促す。

④友達からもらった感想やアドバイス、それに基づいて工夫したことをワークシートへ整理させる。

・子どもが意図を十分に伝えられない場合には、教師が子どもの考えを聞きとり、意図を伝える書き方の手助けをする。
・工夫した点、友だちの意見を生かした点など、旋律づくりの工夫がわかるように整理させる。

以上が実践者の河田教諭から示された指導案（試行実践計画）の概略を、筆者がまとめたものである。

６．６　授業記録

次に授業の音声記録を筆者が文字化したものから、最初に教師がモデルとして示した旋律をクラス全体で推敲する部分を抜粋して紹介する。このように活動へ入る前に“創意工夫のやり方”をクラス全体で共有共通理解化しておくことが大切であろう。（以下、授業の初めに行われた共有共通理解化の部分）

○T　今日はね、きのうの旋律づくりのね、続きを行っていこうと思いますが、今度はね、前後のグループの人とそれぞれの旋律のね、聴き合いっこをしたいなと思います。それぞれ他のグループの子に自分の作った旋律を聴いてもらって、アドバイスをもらいながら、旋律を練り直していきます。そして、今日、最後に完成形を作って、楽譜を書き込んでみます。みんながね、頑張って旋律を作っていたのを見て、私も作ってみようかなと思いました。なんの動物にしたと思う。
○児童（口々に）　うさぎ。
○T　私はね、ライオン。ライオンで作ってみました。動物はライオンで、茂みに隠れて動物を狙い、飛びかかる様子を４小節で作ってみました。どんな旋律になってるか。で、録音をしてきたので。リコーダーよりも、なんかこう、力強い感じが出るかなと思って鍵盤ハーモニカにしてみたんだけど、聴いてくれる。
○T　聴いたあとにね、あの、もっとこうしたほうがいいんじゃないかなってアドバイスしてね。
（教師が作った旋律の録音を再生する）
○T　はい、ちょっとなんかアドバイスくれる人。
○T　どう、今、ライオンの旋律以外にも入ってるものがあったんだけど。
○女　チャイム。
○T　そう、チャイムが入ってるの気付いた。よく耳が働いてるね。他の音が入ったりして、気になることがあるかもしれないけど、でも聞いてほしいのって、そこじゃないよね。なので、いつも相手が作った旋律にしっかり集中して聞いてほしいんだけど。
○男　最後の飛びかかるところ、音が明るくなっちゃうっていうのが、かわいかった。
○T　高いドで終わったんだけど、これで終わるとちょっとかわいい感じになる。じゃ、音変えようかな。
○男　低いドのもあるよ。
○T　低いド。じゃ、ちょっとそれで試してやってみようかな。じゃあ、ここ低いドに変えるとして、他に何かアドバイスある人いる。
○男　はい。えーと、なんか、飛びかかるところだから、クレッシェンドに。
○T　あー、クレッシェンド。どこから。どこら辺からがいいかな。
○男　全体的に。
○男　初めはなんか、静かにしてないといけなくない。
○T　あー、静か。あ、これね。茂みに隠れてるから。じゃあ静かにする強弱記号は何つけようか。
○T　最初の強弱記号、どうしたらいいと思う。はい、ちょっと教えて、こうしたらどうかなっていうの。
○児童（口々に）ピアノ。メゾピアノくらい。
○T　じゃあ試しにメゾピアノでスタートして、今、言ってくれたクレッシェンドを、私がこうやって楽譜を指してる手を進めてくから、ここからクレッシェンドしたらいいよっていうところで、手を挙げて教えてくれる。みんなの意見、教えてね。みんな周りを気にせず、自分の意見でいいからね。
○T（拡大楽譜を指しながら）ここら辺から出てきたね。いろんな意見があると思うけど、３小節目から付けてみようかな。茂みにいるからメゾピアノ、で飛びかかる感じだからクレッシェンド。そして最後、これ、

かわいい感じじゃおかしいからってことだったね。
○男　捕らえた。
○T　捕らえたから、かわいくないね。ガッて感じだからね、かわいくならないように。じゃあ、この真ん中のドを工夫して吹いてみようかな。
（IC レコーダーへ録音して、それを再生して聴く）
○T　もう１回聴くか。何回も聴くっていうのは大事だね、やっぱね。１回だと忘れるよね、耳の記憶って。録音を何回も聴こう。
○男　なんか、どんどん明るくなっちゃう、これ。
○女　ソラシド。（その他、児童が口々に発言）
○T　あー、これ以外で何かアドバイスくれる人いる。今、たくさん出てきた言葉、結構いいことあると思うから、みんな、自信もって言っていいよ。
○男　うんと、ドドドソラシドじゃなく、低いほうがいいと思う。えーと、ソ、ドから低くして。
○T　これより低くするってこと。
○男　ギリギリ低く。
○T　ドロロロ・ロロロロ・ロン（低い声）とか。
○男　あ、ああ、いいかも。
○T　みんなは？このタラララ・ラララララ・ラン（高い声）か、ドロロロ・ロロロロ・ロン（低い声）か。
○男　この２個目の。
○T　自分の意見で自信持ってよし。それぞれの感性があるので。結構なんか、いろんな意見が出てきて、そうやってたくさん見つけてくれた、その視点をね、あとで友達のを聴くときに生かしてくれる。いい。じゃ、みんなで工夫したのを吹いてみます。最初はメゾピアノか、どんなもん。これぐらい。
○T　もうちょっと強く吹いてもいい。これぐらい。さっきはね、（吹く音）で吹いてみたけど。
○T　あ、大きいか。どう。（児童の反応）
○T　よくなった。じゃあみんなの意見を全部採用して完成にしようかな。今日はこの後、今やってみたように友達のをお互いに聴いて、アドバイスし合って工夫してほしいです。その時、手直しのための IC レコーダーへの録音は、必ず２回以上行って下さい。（以下、グループ活動）

以上のように、最初に教師が全員に対して行ったアドバイス交流を通して作った旋律の創意工夫や推敲を体験しているので、その後のグループ活動では活発に意見交換をしながら旋律と向き合っていた。その間、教師は各グループを周って児童へ問い掛けを行なったり、児童からの相談（主に音符の書き方やリズム）に応えたりして、アドバイス交流を活性化させていた。このグループ活動の後、モデルとして事例を取り上げてクラス全体へ紹介し、作った子供のイメージが伝わっているかを試聴してから授業を終えている。

７．研究授業の分析と考察

７．１　実践後に児童へ行ったアンケートの分析

筆者も研究授業の様子を参観していたが、ほぼ全員が「音楽づくり」に積極的に取り組み、グループでの意見交換やアドバイス交流、授業末尾の全体での意見交流も含めて「音楽づくり」の活動を楽しんでいた。下に載せている実践後アンケートの結果からも、それを窺い知ることができる。ただし、２項目目の「旋律を考える時に IC レコーダーは役に立ちましたか」という問いに対して２名が「いいえ」と回答しているのだが、その内の１名は自由記述へ「雑音も入るし、演奏した旋律の音も悪いから、あまり好きではない」と記している。しかし自由記述で IC レコーダーの音質や雑音を指摘しながら、それでも効果があったと回答している児童も少なくないことから、当該児童が雑音にとらわれ過ぎたのか、あるいは未だ狙った音を選別して聴き取る力が不足していたことが考えられる。

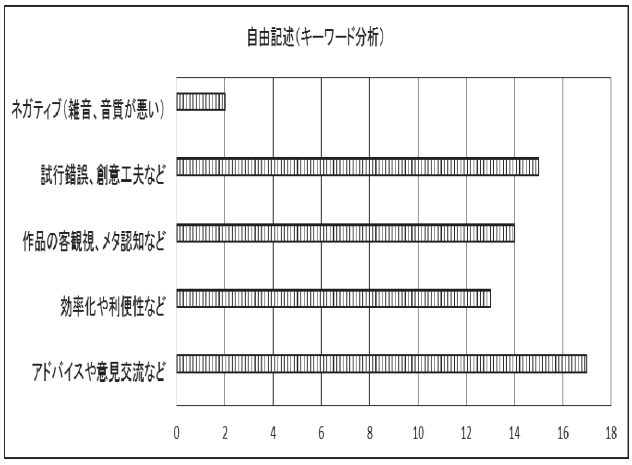
［実践後に実施したアンケートの結果］

	はい	いいえ
旋律を考える時にICレコーダーは役に立ちましたか	27	2
ICレコーダーを聴いて、旋律を工夫しましたか	29	0
ICレコーダーを聴いて、アドバイスし合いましたか	28	1
ICレコーダーを使って旋律をつくる活動は楽しかったですか	29	0
もっとICレコーダーを使った活動をしてみたいですか	29	0

７．２　児童の自由記述の分析

自由記述欄に記された文章からキーワードをカテゴライズして、その頻出度をグラフ化している。これによると、IC レコーダーを用いた活動に対して、特に「アドバイスや意見交流」と「試行錯誤や創意工夫」について半数以上の児童が肯定的に言及していることが分かる。これらは教師支援に関することも含んで記述されたものが少なくなかったことから、授業の最初に教師とクラス全体で行った創意工夫や、グループ活動中に児童へ問いかけたりアドバイスしたりしていた教師による働き掛けも有効であったと思われる。

［自由記述のキーワード分析］



７．３　考察

今回の試行実践の結果を整理して、本研究のまとめとして次の 9 点を提案したい。

①機器を用いて音符並べをしながら“なんとなく良さげな旋律”を作るのではなく、最初に“作りたい（表したい）イメージ”をしっかりもたせてから活動に入ることを大切にさせる。

②“吹いたその場で消えてしまう演奏”だけを手がかりにするのではなく、録音に残ったものを基にして工夫すると、思考を伴った試行錯誤に取り組みやすい。（モニタリングに有効）

③録音再生を振り返りながら工夫するため、効率よく活動を進められる。（リフレクションに有効）

④作った児童も一緒に録音再生を聴きながらアドバイスをもらうため、他者との意見交流や共有が行いやすく、分かりやすい（相手に伝わりやすい）。

⑤最初はよいと思っていた旋律でも、録音再生を聴くことで自分が表したいイメージと異なっていると思い直す場面が多く見られたことから、児童自身のモニタリングやリフレクションに繋がっていたと思われる。この“思っていたのと違う”と自ら判断するようになった児童の変容を“成長”と捉えたい。

⑥その場で演奏する場合だと演奏技術の問題や緊張からくるストレスがモニタリングやリフレクションを阻害してしまうことも考えられる。しかし、録音再生を活用することでこれらの問題がもたらすプレッシャーが減じるため、児童自身も安心して活動を積み上げやすくなったと思われる。（ストレスフリーに活動の足跡を残しやすい）

⑦できあがった旋律の出来栄えだけを総括的に評価するのではなく、録音再生を通じたモニタリングとリフレクションにより活動のプロセスを形成的に診断することができていた。このように活動の途中で、取り組んでいる自身の姿を直視することができたことから、思考を伴った試行錯誤をより深めやすかったと思われる。（評価が次の課題設定へと繋がる）

⑧児童の主体的な学びを求めるためには、教師から積極的に声を掛けたり、敢えて否定的に問い掛けたりすることが有効であった。さらに適宜知識や技能に関するサポートを行うことが、その有効性を高めていた。

⑨今後は、より長い旋律を作る活動へと繋げる方策や、「音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み」を生かした「音楽づくり」の活動へと発展させる方策を模索することが求められる。

おわりに

本研究では、偶然性に依拠したり機器に頼って音符並べをしたりする「音楽づくり」の活動から離れ、子供にとって身近な IC レコーダーと鍵盤ハーモニカを用いて、自らが抱いたイメージに向かって「音楽づくり」を創意工夫する活動の有効性を検証した。そこでは録音再生を繰り返し聴いたり、録音再生を基にして他者からアドバイスをもらったりしながら、自分が表したいイメージに少しずつ近づいていく創意工夫を、思考を伴った試行錯誤によって深めることができていたと言えよう。

本報告では、動物のイメージと結びつけた南山大学附属小学校での試行実践を紹介したが、次の報告では沖縄音楽と関わらせた春日井市立勝川小学校の試行実践を紹介したい。

最後になったが、多忙な中、約半年に亘り準備を整えた上で貴重な研究授業を提供して下さった河田愛子教諭と小瀬木崇教諭へ心より感謝している。また快くご協力をいただいた両小学校の関係者にも、深く謝意を表したい。なお研究は「カワイサウンド技術・音楽振興財団」から研究助成を受けて行っている。

［参考引用文献］

＊B.J.ジマーマン、D.H.シャンク編著、塚野州一編訳、『自己調整学習の理論』、北大路書房、2006
＊B.J.ジマーマン、S.ボナー、R.コック著、塚野州一・牧野美知子訳『自己調整学習の指導―学習スキルと自己効力感を高める―』、北大路書房、2008
＊森敏昭・岡直樹・中篠和光著『学習心理学―理論と実践の統合をめざして―』、培風堂、2011
＊文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』、(株)東洋館出版社、2018
＊『小学校　新学習指導要領の展開』、明治図書、2017
＊『平成 29 年改訂　小学校教育課程実践講座　音楽』、ぎょうせい、2018
＊『はじめて学ぶ教科教育　初等音楽科教育』、ミネルヴァ書房、2018
＊『最新　初等科音楽教育法［改訂版］小学校教員養成課程用』、音楽之友社、2018
＊拙著『改訂版　新しい視点で音楽科授業を創る！』(株)スタイルノート、2011
＊拙著「次期学習指導要領の構造化され再構築・更新される知識に注目した小学校音楽科の実践的一考察－小学校４年生を対象とした創作わらべうたの実践をもとにして－」、『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』、pp.117-124、愛知教育大学、2017
＊拙著「生きた知識と生きた技能を生き生きと身に付けられる音楽科への期待－既知の知識と向き合い自分なりの捉えで創生していく構造化、再構築・更新される知識とそれを支える技能－」、『学校教育 No. 1194』、pp.34-37、広島大学附属小学校学校教育研究会、2017

（2018 年 9 月 4 日受理）

動物の様子と音楽の要素について考えよう

（J・R・P）5　番号　　名前 ＿＿＿＿

●『序奏とライオンの行進』『めんどりとおんどり』を鑑賞し、
“リズム”“音の高さ”“強弱”について気付いたことを表に書きこもう。

動物	リズムどっしり。	音の高さ	強弱
ライオン （獲物をつかまえようと、がんばっている様子。） 	・一定のリズムをきざんでいる。 ・リズムは、はやかった。 ・「く」がたくさん使われていた。 ・♫ 流れる感じ	・明るい音が出てきて、おどろおどろしい音がでてきた。 ・低い音と高い音が合わさっていた。 ・低い音の方がたくさんあった。	・強い音が多かった。 ・弱い音は、小さな音だった。
めんどりとおんどりたまごにけ回っている様子だと思う。 	・糸巻かなりズムと、なめらかなリズムが合わさった。 ・一定のリズムがきざまれている。 ・「く」がたくさん使われていた。	・ライオンと比べると高い音が使われている。 ・高い音がほとんどだった。	・強い音が多く、ーフーフの音が目立っていた。

羽とおどり
頭の動き
・鳴き声
・♪が使われている
・八分音符

<考えのヒントとなる音楽の記号>

p mp mf f

他にもいろいろあったね。
教科書７０ページが参考になるよ。

●クラスのみんなで考えた動物のうち１つにしぼり、様子・リズム・音の高さ・強弱を考えよう。

動物とその様子	リズム	音の高さ	強弱
サル	手長ザル（長） 速	高い ウッキー 低い	木を登る く（クレシェンド）

※この表にまとめる内容は、あくまで一つの考え方。他の考え方ももちろんOK！

●自分が作る曲のテーマとなる動物を決めよう。

ぼく・わたしは、［ サル ］をテーマにして曲を作ります。

その動物が［ 木をがんばって登っている ］様子を表します。

［　　］と一緒に曲を作ります。

ぼく・わたしは　（　前半　・　後半　）を担当します。

曲をつくろう① (J・R・P) 5 番号 名前 女

●自分の動物を表すための工夫（リズム・高さ・強弱など）

・低い所から高い所へ変える。だんだん高く。
・細かなリズム

●曲をつくろう

動物（ サル ）

様子（ 木をがんばって登っている様子 ）

< ハ長調（最後の音はド） ・ イ短調（ソに＃・最後の音はラ） >どちらかに○を

< 4小節（基本はこちら）・ 8小節 >どちらかに○を

※楽譜は何度でも直してかまいません。

●録音１回目の感想・お友だちからのアドバイス（具体的に）

・高さやリズムが合わなくて、あせった。しけんに考えると作曲するのに(8小節)30分かかってビックリした。

●録音２回目の感想・お友だちからのアドバイス（具体的に）

●今日の完成形 録音

グループ番号 5 完成形録音日時 3月15日 9時 30分

曲をつくろう②

●曲の紹介をしてから曲を聞いてもらい、感想・アドバイスを書いてもらいましょう。

※紹介の例

前半の動物は○○で、○○○が作りました。
○○○な様子を表しています。
後半の動物は○○で、○○○が作りました。
○○○な様子を表しています。

１人は赤ペンで楽譜に。１人は鉛筆で感想を。

感想・アドバイス

記号を使っていていいと思う。どんどん音が低くなっていって、デクレッシェンドがいいと思う。8分音符をもっと増やしてかんばってサルが木に登る様子をもっと出した方がいいと思う

●友だちの意見を参考に、曲をさらによくしよう。

録音して何度もきいてみよう。 今日録音した回数（○をつけよう） 0

今日手直ししたところを具体的に書きましょう。

・手早く早登る様子を見せたいので8分音符や16分音符を使おうと思った。

《完成形の楽譜を書きましょう。》 （自分の曲だけ書きます。）

曲名 作曲者